書評

A・リンドベック著（八木甫訳）『ニュー・レフトの政治経済学』（一九七三年、日本経済新聞社、一七一頁）

斎藤　正

㈠　本書の解題への序説――「厚生経済学」を研究している私には、最近の新らしいしかも激しい社会の変動に対する経済理論の非現実性への批判にさらされ、そのたびに経済の純粋理論の自己完結性のおきてを守って理論構成の斉合性の中にうきみをやつしている現状から脱却せんと、社会学的アプローチに救いの道を求めんとしている。政策理論としての「厚生経済学」は市場の欠落の理論的展開、ミシャン流の厚生理論「経済成長の代価」などにより社会問題を現代的に捉えはじめている。しかし多くの者はあまり耳をかさず、さらにガルブレイスが長い研究活動のうちに、現代資本主義批判として提起した「豊かな社会」「新しい産業国家」を発表したときも、冷やかにまたは厳しいじん問に合い、厚生あるいは人類の福祉が学会で等閑視されていたのが、数年前までの経済学会の実情でなかったかと思われる。

わが国では、サミュエルソン流の形式論理的数理分析に対し大坦に批判論文を発表したのは、昭和四六年一月四日、宇沢弘文教授の「混迷する近代経済学の課題」（日経）であったと記憶する。「効率性」「最適性」のみを追及する形式論理的演算が、ベトナム戦争の枯葉作戦の成功をたたえた人間疎外のマクナマラ国防長官のブライト委員長の批判的質問に対する答弁の裏には、近代経済学の形式論理的効率性理論、経済の合理性、純粋性を誇っていた近代あるいは現代経済学の基本的考え方があったのである。

わが国は、公害、経済の高度成長への反省からようやく目ざめ、「厚生経済学」の非現実性への批判から前進し、丁度、四六年、現代経済研究会が、稲田献一、小宮隆太郎、村上泰亮、新開陽一、辻村江太郎、内田忠雄、宇沢弘文の諸教授により結成されその編集になる季刊現代経済が、その年の六月に第一号を発表、現代資本主義、現代経済学への反省とくに弱者の論理（稲田発言）を一つの編集方針としてうちだされ、既に第十号を迎えた。発刊にあたり、内田忠夫教授は「近代経済学という私たちの足場は補強される必要のあることも明らかである。ある場合には、足場を解体しなければならないし、他の場合には、新しい足場の創造が要請されることになるかもしれない。それを補強するにせよ、解体するにせよ、あるいはまた創造するにせよ、論理は見解によって曲

げられないという原則は厳しく守られなければならない」（季刊現代経済第一号五頁）とし、その中で、時間の流れの中での現代の課題をラディカルに受けとめ、それと正面から取り組む姿勢に立ったのである。学会および福祉社会へ向ってのわが国の経済研究者、実務家への貢献は、従来の経済理論をのり越えんとするあるいは社会の福祉の現実に理論づけをすることにどれだけウエイトを与えたかは、最近の経済学がエコロジーを含めなければ時代遅れとなってきたことが裏書きする。

季刊現代経済第一号にて私は漸やくラディカル・エコノミックス、ニュー・レフトの概要を知る機会を得た。従来のマルキシズムをオールドとしてそれを越えたところに「福祉」の今日的意味を求めんとしているアメリカ社会の困乱せる社会問題、日本と比較にならぬ複雑な反抗文化の知識体系化への第一歩がみられた。元来、ラディカルという名称は今日の学説にだけつけられるものでなく、資本主義経済社会の理論が、純粋な形で始ったときより、つねにニューという用語がそのたびごとに用いられるものである。古典派、新古典経済理論で解明出きない一九三〇年代に生れたケインズの「一般理論」は、クラインの名づけたごとく革命であった筈で、最近のボウルディングの「経済学を超えて」その他の同著者の論著にみられる学際的研究に接したときも、ラディカルに値する名がつけられるべきであったろう。さらにガルブレイスの「新しい産業国家」にもラディカルな性格を感じとった。時代の変遷と共に人間の思想、価値観の変化を意味するものである。ケインズ理論は別として、ガルブレイス、ボウルディングの優れた経済学には経済学の自己完結性の論理構成からはずれたものとして、ラディカル性を強調するものはなかった。しかしこの数年アメリカ社会に生じた反抗文化の中から経済学にあってニュー・レフト（ラディカル経済学）が生じてきた。わが国にこの学説をそのままとり入れるには笑止の沙汰と思われるが、本書の序文に一見奇異に思われるP・A・サミュエルソンの長文の頁がさかれているのであり、この書の著者リンドベック氏のため「リンドベック酒を試飲しようとする諸者に、私は〝乾杯！〟する」という語句でくくっていることは、数理的斉合性を求める経済学者サミュエルソンも、激しい社会の動きに身をひそめることのできないこと、換言すれば、経済学が純粋経済学から社会経済学へ、そして政治経済学へフィード・バックしてゆく経済学の本質にかえることを示しているのでないか、この意味で、ニュー・レフトについて最近発表される諸論文に接するものにとって、本書が入門的意味をもっていることの意義を見るのである。

㈡　ニュー・レフト（ラディカル経済学）について――本書の紹介に入る前に予備知識としてもう一つステップをつくって、この経済学が発生した起源を記さねばならない。とい

うのはアメリカの反抗文化の運動の中で次第に経済行為への理論づけが試られつつあるからである。そもそも、今回のラディカルといわれるものの発生は、アメリカ社会において生じたのであり、昭和四六年一月一二日付「タイム」は「ニュー・レフトの旗上げ」と題して「アメリカの大学社会を吹きまくっているラディカルスの抗議が、経済学の分野であらわれたのはかなりおそかった。だが、先週開かれたアメリカ経済学会（ＡＥＡ）のマンハッタン大会で、ついにそれは爆発した。……会場整理員の制止を振り切って総会会場に入ったラディカルスは、同僚の保守的経済学者たちを、〝不平等、環境破壊、帝国主義、人種主義、女性の隷従の手先〟であると告発した」。

このラディカルスは、経済学でニュー・レフトと呼ぶのであって、この学派は資本主義社会を社会的勢力の葛藤の場と捉えるマルクスの洗礼をうけながらも、いわゆる近代経済学や経済学者のあり方を批判する一方で近代経済学において開発された分析手法を積極的に活用していこうとする姿勢を示している点で体制変革を唱える同じくラディカルな立場にあるマルクス経済学者や他のグループとは異なっているものである。したがって共産党を中心とする既成左翼の「オールド・レフト」より数歩すぐれていよう。（季刊現代経済第一巻参考）

アメリカ社会で発生したこのラディカルス運動をブロンフェンブレナー教授の論文により整理すると

①所得、富、権力の不平等分配
②資源の悪分配――過大な軍事支出、民間消費財と公共財、サービスの不足
③社会的費用（外部性）の増加――汚染、過密人口、資源涸渇、疎外
④軍国主義（ベトナム戦争）と人種差別（都会のゲットー）
⑤経済的帝国主義、新植民地主義（マルクスの窮乏化拡大の国際版）

で経済分析のカバーしうる範囲より大きい問題領域であり、しかし、青木昌彦教授が経済セミナー七三年七月号「経済学の諸パラダイム」に「ラディカル・エコノミックスをそのあるがままの姿において、日本に輸入、移植しようとすることは、いうまでもなくこっけいである。」が、高度成長により生じた社会悪とくに福祉経済へ向う情勢にあって、右のブロンフェンブレナー教授の指摘したニュー・レフトの項目の中にあてはまるものを数多く見出すことができ、とくに季刊現代経済第十号が「福祉経済学の新構成」（最近、厚生という用語がいつのまにか福祉にすりかえられている）という問題意識で取組んでいることからみて、とくにＱ・Ｊ・Ｅ、七二年版の中のＨ・ギンタスの論文は「厚生経済学」と社会問題への結合の一つの橋渡しをなさんとする意欲あるラディカルスの論文なども紹介され、経済学の諸パラダイムの発展にと

り組むためにも、本書はニュー・レフト経済学の問題理解のため意義を感じる。

㈢　本書の内容――市場メカニズムの適切な作用によって、個人の選択の自由、資源の効率性の意義を認める価値判断を前提として論理が抽象化され、つねに市場システムの理想的はたらきを確保するいくつかの条件をもとに構成されている新古典派理論への批判は、市場欠落の理論により補われているが、伝統的、新古典派の理論の仮設より根本的にくつがえさんとする批判が「反抗文化」のアメリカに生じた。この著書を読む問題意識はいろいろあるだろうが、注意しなければならないのは、現代資本主義社会の欠陥批判のあとにくる建設的、いまよりベターな社会を如何に描きだしているかということに焦点をあてることは、ニュー・レフト派の未だ体系化されない今日の一つの興味でなければならない。もちろん本書の著者A・リンドベック（Assar Lindbeck）は一九七一年 The Political Economy of the New Left――An Outsider's View――という題名の示すごとく、ニュー・レフト派に属するものでなく、スウエーデンのアメリカの客員教授であり、アメリカ滞在中、ケンブリッジ、ニュー・ヨーク、バークレー、とくにサミュエルソンの本拠地マサチュウセッツなどの講演の草案であり、ニュー・レフト派の経済学の輪かくと問題を簡単に説明したものである。P・A・サミュエルソンの本書への讃辞から見よう。「リンドベック教授の目次をみて、このような形のニュー・レフトに対する関心から心をぬぐい清めよう。生活の質に関する関心は急進派が独占していることではない。あるいは資源配分の調整者としての分権制に対する官僚制そのいづれも拒否しようとする例の性向について考えてみよう。その論理的齊合性がどうであれ、この性向は政治的スペクトルの全域にわたって共振的反応をまきおこす。リンドベック教授は都市における家賃統制から予想される不公平と非効率が需要と供給というもっとも基本的な道具によって、正しく予測されうるであろうことを指摘している。このことにより、彼がアメリカのあらゆる大学生の髪の毛を逆立たせるであろう――これが彼の本が読まるべきなおいつそうの理由である。」（一六頁）リンドベック教授の重要な認識では、ニュー・レフトに関する新しいそして最も注目すべきことの一つは、大学精神とでも呼ばれうるようなもの――とくに若者たちの――が支配的であるということにある。サミュエルソンはこのことに注意を喚起して、本書への序言へのむすびとして、リンドベック教授はその前提として、ニュー・レフトについて、またサミュエルソンが現代意識とさけんだものについて議論している。すなわち、彼にはラディカル・エコノミックスと呼ばれている、あのより狭い運動について議論しようという意図はまったくないということであり、教授はアメリカの各大学にあってとくに、ボールス、マッキーン、ギンタス、マーグリンそ他多数の研

究活動がニュー・レフト派として提示されている最中に、客員教授として客観的立派から冷静にニュー・レフト経済学を説明したことにサミュエルソンの讃辞の本心があるようである。これは「良いぶどう酒は飾り立てた紹介など必要はない」（一四頁）という語句につきる。

いま本書の目次を記すが、私がこの書評を記す動機は、Q・J・E、一九七二年の五七二—九九頁にあるニュー・レフト研究者 Herbert Gintis（ハーバード大学）の「厚生経済学」のラディカル分析、さらにQ・J・Eの本書に関する一九七二年のシンポジウム、加えてわが国の「厚生経済学」の第一人者熊谷尚夫教授の経済セミナー四月号（一九七三年）で、「近ごろこれほど完全に共鳴を感じながら読んだ本は他にありません」（同上書七頁）という論文で、この書への強い学問的衝動にかられたからにほかならない。目次は次のごとくである。

序　章

I、ニュー・レフトの伝統的「経済学」批判

伝統的分配理論

嗜好を所与とする伝統的資源配分論

生活の質

大きな変化と小さな変化

政治的考察の役割

II、ニュー・レフトの現代経済批判

市場と形式化された管理過程

集権制対分権制

資本の所有

物質的インセンティブと分配問題

競争

「発展」の意味

III、ニュー・レフト経済学の行方

となっている。表題のそれが示すごとく、従来より現代にいたる伝統的ミクロ経済理論への批判であり、リンドベックの解釈するニュー・レフトの批判は、伝統的なものについては次のごとく解釈されている。

第一の批判は分配理論の古典的見解は、典型的に「静態的」な性質であることを衝き、さまざまな個人の生産性が変化するような長い期間にわたる「動態的」な社会経済過程について経済学者は余り深く研究してこなかったことをあげる。（四三—四四頁）第二の批判はとくに「厚生経済学」の理論的批判として、ギンタスの論文に激しく指摘しているように、生産部門にたいする生産諸要素の配分問題を分析する場合、すなわち資源配分に対して、あまりにも部分的アプローチを行ない易く、選好一定の仮設のもとでの論理構成を非難し、選好の形成に関する考察を社会学のような他の学問分野に委ねている点である。この点は既にヴェブレンが古く取扱っているものである。（四四—四五頁）この批判の第三は

生活の質に払った注意が余りに少なかった点についてであり、これは伝統的経済学が貨幣による経済量を分析の主要手段としていたことによるもので、最近の環境悪化を説明する場合、なるほど、「外部効果」の理論を持ち合わせているが、教科書では外部性の問題は殊更に脚注に回されてしまう傾向があり、経済学の教科書の中で社会的諸条件を分析の中心に据えることがほとんどないとしている。（四七―四八頁）さらに第四の批判として、従来の経済学が限界的変化にとりつかれ、質的変化についてあまり議論しないというのである。（四九頁）これらのことはさらに「比較経済体制論」という重要だが困難な分野を軽視してきたことに帰因すること、すなわち、経済的要因と政治的要因の相互作用の問題を等閑視したと批判する。特に経済学者は経済における勢力の分配問題を回避してきたことであり、社会的バランスのみに「調整」を求めていることの示唆した理論が批判されている。（五一頁）

ニュー・レフトの以上の五つの批判の評価について著者は「経済学者は経済学者にすぎず、同時に社会学者、政治学者、心理学者、哲学者等々でないことを非難するもの、すなわち、ニュー・レフトの批判はより学際的な研究を主張するものであることと解釈している。ときにニュー・レフトは経済学の分析が数学的、計量的手法の使用を含む技術的経済学に対する方法論的反発とむすびついている。しかし基本的には、ニュー・レフトが問題としているのは、一つの集団としての経済学者が、彼らの研究課題の共同的選択において、経済の諸作用のさまざまな構成要素に対して付してきた優先順位のことである。優先順位は主観的評価の問題で、もっとも才能ある人々のうちで、大きな経済的、社会的重要性をもった領域にたづさわってきた人は、ほんのわずかにすぎなかったのである。たとえば選好効果と広告効果、外部性の役割比較経済体制などの領域は等閑視されてきたのである。（五九頁）しかし一つの困難は抽象化のレベルがあまりにも高すぎる場合が多く、門外漢はそこで研究されている問題の現実とのかかわりあいを理解していないということにある。（六〇頁）

経済研究にとってさまざまなアプローチが有用であることを誰にでも納得させる誰一の道は恐らく各人に彼の信ずる方法を試みさせ、その結果専門家全体で比較することである。この意味することは、新しいパラダイムとしてラディカル・エコノミックスを発展させようとする若い経済学者のグループが、経済研究にとって重要な貢献を実際になしうるかどうかをみるために、しばらくまたなければならないということである。（六〇頁）

私はこのことが、この経済学を評価する重要な態度だと考える。ギンタスの「厚生経済学」のラディカル分析を読んだとき、またQ・J・Eの本書のシンポジュムを読んだとき、

ニュー・レフトの経済的社会的研究が、市場メカニズムを生かし、選好の一定仮設をひろく文化構造からパーソナリテー構造へ結びつけて拡張せんとすること、情報の研究が需要サイドから供給サイドに伝達するのに一役買っていると解釈もできる。

本書を解読する問題意識はいろいろあろうけれど、問題は本書のⅢ、ニュー・レフト経済学の行方に関する著者リンドベックの達観である。それは、社会学者ニュー・レフトの文献とその議論の中で著しく見落していることは、あらゆる社会・経済システムにおいて生ずる諸問題の解決に含まれている巨大な困難を、彼等がどのように自覚しているかということで、あたかも「革命」または「集団的」所有あるいはその両者によって「一発」で除去しうるというように論じられる一般的傾向の指摘である。（二五六頁）真の問題が起るのは革命以後なのである。こうした観点からみれば同じことになるのだが、真の問題は、革命がなくとも始っているのである。しかしニュー・レフトの文献には、経済学者を主として悩ませている諸問題をどのように解決するかという方法にかんしては、きわめてわずかしか議論されていないということである。リンドベック教授はこれらの問題を具体的に数多くならべ、一つ一つにニュー・レフトの答を求めんとしている。（一五六―一五七頁）ただニュー・レフトの著作のメリットは、政治的論争における数多くの永遠の課題を再び思い出させてくれたことであったことであることで結んでいる。

この意味で、私の研究から興味を惹くのは、Ⅱニュー・レフトの現代経済学批判の中の「競争」と「発展の意味」の項である。競争に関し、ニュー・レフトは倫理的意味から反対の論文が多い。（一二九頁）しかしながらリンドベック教授はあくまで配分と経済厚生に関する静態理論をもっており、それによるといくつかの理想的条件の下では、選好と技術所与とみなしたとき、完全競争経済の最適資源配分が出現する点を主張し（一三一頁）これは静態的配分理論が主に「最適」という意味を理解し、定義するための一つの手段であり、相対価格が非常に大きく歪んだ場合、経済にとって、いかに高い代償がかかるかを示すこととをのべていること。経済効率の観点からは、競争は二重の役割として、(1)生産要素や商品の価格が、生産費用を反映する水準にまで押し下げられ、(2)企業が市場の信号に反応するのを余儀なくされること、さらに既存の生産物によく類似した代替物が膨大に増大して競争は決定的に強まることを論じ、競争のない社会の効率低下、さらに階級なき社会は社会が開放されればされるほど、個人間競争は大きな役割が与えられることを強調する。（一三七頁）この点は、ニュー・レフトの競争原理への反論は沈黙してしまう。

次に「発展」の意味については難かしい問題だが、とくに本書ではアメリカの「過剰消費」に対し筆者の好みとして反

対であり、アメリカ社会が過少発展国に特有の相貌を、他のいくつかの高所得国よりも、実ははるかに多くもちあわせている（一四一頁）という意見は、発展に関する意味づけの複雑な困難な要素を含んでいることを表現するものである。多次元的な発展の定義からみて、ニュー・レフトのいう「過剰発展」国アメリカという意見に反対している点は卓見であろう。

Q・J・Eのシンポジゥムの内容が本書の「訳者のあとがき」に整然とのべられていることも便利であるが、季刊現代経済第一号にあるように、ニュー・レフトが体系としていまだ一つの学派として明示しうるものがないのが現状であり、純粋経済から政治経済への一つのプロセスとして社会経済あるいは社会学と経済学の融合が試みられてこそ、そこにニュー・レフトのとく現代資本主義の理論と実際の格差を埋める仕事ができるものだと、本書を読んだときその感を深くする。